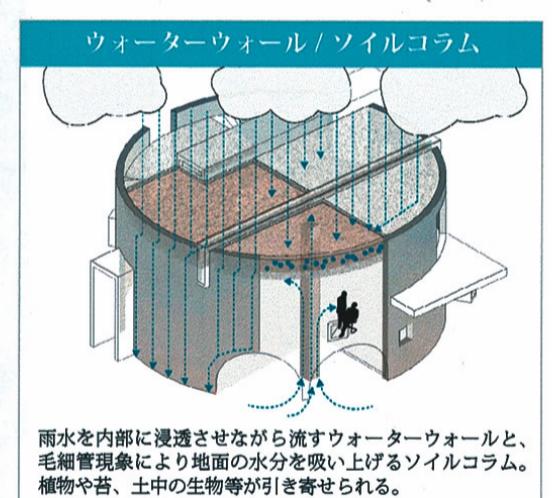
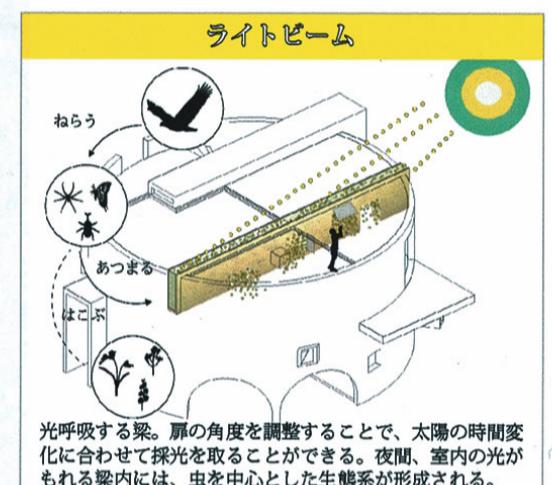
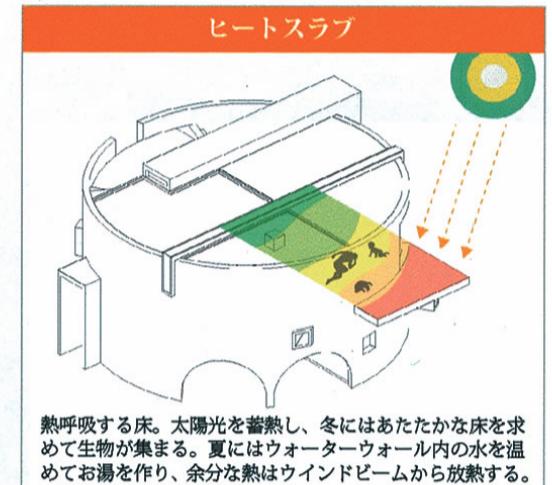
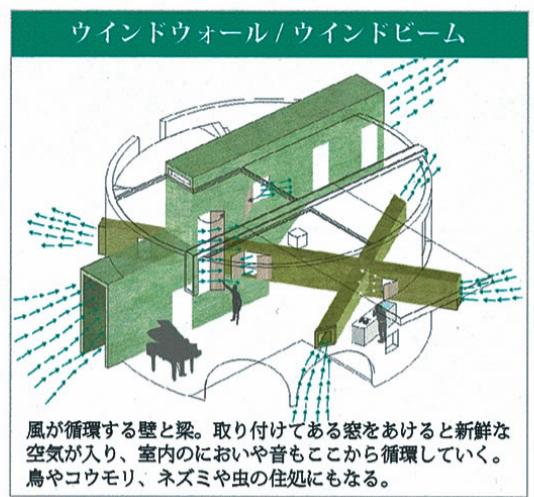


environmental node

風呼吸するウンドウォールを強い風が吹き抜け、ウンドビームは音や匂いを届けてくれる。熱呼吸するヒートスラブは私たちに太陽の光を暖かく提供し、光呼吸するライトビームから落ちる灯に生き物たちが集まる。水呼吸するウォーターウォールを通って雨水は静かに地上に落ち、土呼吸するソイルコラムの中にゆっくりと染み込んで植物や空気を潤していく。

個々のエレメントは建物全体の構成要素であるとともに、それぞれが周囲の異なる外部環境を取り込み、循環させる存在だ。エレメントを介して複数の生態系が折り重なり、この家は周囲の環境の結節点として現れる。人も、虫も、苔も、植物も、鳥も、ネズミも……、あらゆる生命がヒエラルキーなく存在し、この家の中で呼吸する。



01. 葉脈からの学び

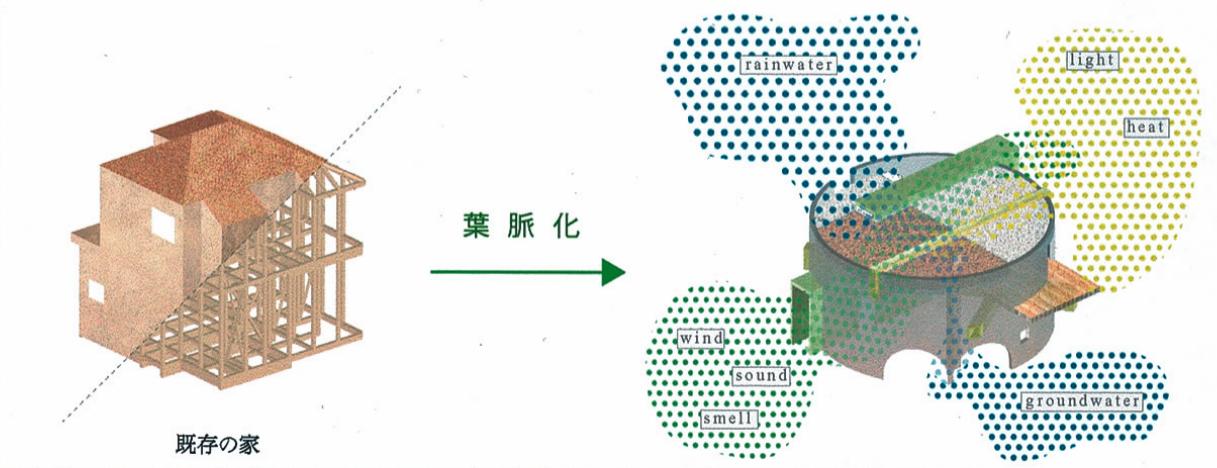
葉脈は水やデンプンを運ぶ通路である一方で、葉の機械的な支持にもなう。つまり葉にとって葉脈は、外部から取り込んだ物質を循環させつつ構造にもなるという意味で、「呼吸するストラクチャー」といえる。葉脈を単なる枝分かれのジオメトリーとして見るのではなく、むしろこのような2重の機能を持っていることに着目して、私たちは建物を「葉脈化」することを試みた。



02. 呼吸する架構

建物を構造的に支持するストラクチャーは、大抵の場合、外装材や仕上げをともなって内部と外部の境界面となる。本提案では、この内外の境界である建物の「膜」を環境を含みこみながら柔らかくほぐすために、葉脈化させた、構造的な支持という機能に加え、内部と外部環境を取り込み循環させる「呼吸する架構」。

架構は屋根や壁、梁や柱といったエレメントの集合体であり、各エレメントには独自の特性が備わっている。それを踏まえ、私たちは架構を一旦エレメントへと還元し、各エレメントにふさわしい外部因子(風、雨、光、熱...)を循環させることとした。風呼吸する壁 / 光呼吸する梁 / 水呼吸する柱 / 熱呼吸する床…といった具合に。呼吸する架構は外部からそれぞれユニークな生態系を呼び込み、人々に独自のふるまいを喚起させる。



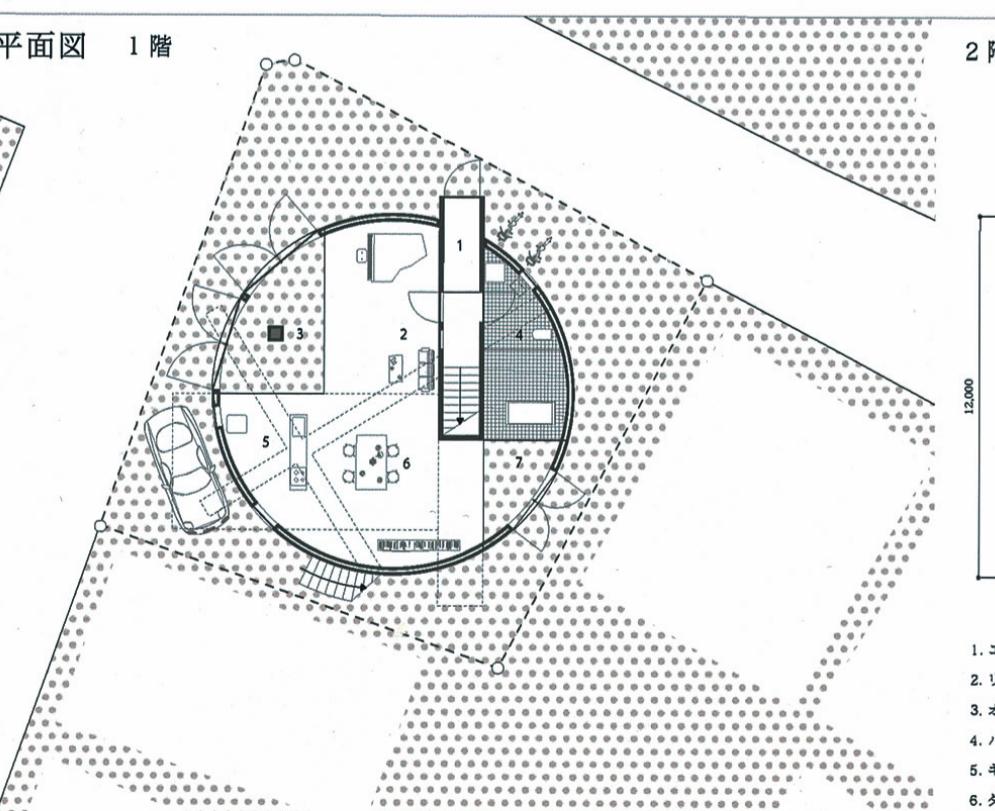
03. 現象する結節点

敷地は群馬県高崎市の郊外の、五叉路に面した角地である。ここは典型的な郊外の住宅地で、まわりには類型的な家が立ち並ぶ一方、周囲を山に囲まれており、冬には赤城おろしと呼ばれる強い風が吹く。

このような不整形の敷地に、北側にボリュームを寄せて南面に庭をとるという類型的な建ちはそぐわないと考えた。そこでまず、周囲に正確の異なる4つの外部空間をつくるように、敷地の中央にボリュームを集約して配置した。風呼吸する壁、光呼吸する梁、といった構成材は、各々の論理によって異なる方向を向しながらボリューム内に配置されるが、方向性を持たない円形の外形により統合される。この家は、多様な生態系の結節点となり、人間だけではなく様々な主体が同時に住むことのできる建築としてこの場所に現象する。



平面図 1階



2階

